

山口県の隕石(Ⅳ)

松尾 厚・岩村 和政

Meteorites of Yamaguchi Prefecture. Ⅳ.

Atsushi MATSUO and Kazumasa IWAMURA

山口県立山口博物館研究報告

第46号(2020年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.46(March 2020)

山口県の隕石 (IV)

松尾 厚¹⁾・岩村 和政¹⁾

Meteorites of Yamaguchi Prefecture. IV.

Atsushi MATSUO¹⁾ AND KAZUMASA IWAMURA¹⁾

Abstract

For more than half a century, Yamaguchi Museum has been investigating records and legends of meteorites that fell in Yamaguchi Prefecture, and has collected related materials. In the process, Yamaguchi Museum contributed to the rediscovery of two meteorites in Yamaguchi Prefecture. In this paper, we report the findings since the previous report by the Yamaguchi Museum.

1 はじめに

隕石の科学的研究は太陽系の誕生や初期の状態を知る上で重要であるが、隕石の発見・回収例は限られており、ましてその落下を直接目撃することは非常に珍しい。そのため隕石の落下については全国に様々な記録や伝承が残されており、これらの記録・伝承は文化的にも貴重なものとなる。近代以降は新聞等でも全国的に報道されるなど、社会的にも大きな反響がある。

山口県立山口博物館（以下山口博物館）では、半世紀以上にわたり山口県内の隕石落下についての記録・伝承の調査と関連資料の収集を続けている。その過程では山口県に落下した隕石（以下、県内落下隕石）2個の再発見にも関わってきた。本稿では主に山口博物館による前回の報告[1]以降の調査結果を記すこととし、山口博物館が収集した県内落下隕石に関する文献や関連資料については、次の機会に紹介したい。

本稿のタイトルを「山口県の隕石 (IV)」としたのは、1960年代に山口博物館の天文担当であった村岡^{もと}や本による調査のまとめ「山口県の隕石 (I)」[2]、「山口県の隕石 (II)」[3]、「山口県の隕石について」[1]の続編の意である。なお、本稿の著者のうち松尾は1987年（昭和62年）4月に、岩村は2019年（平成31年）4月に山口博物館に着任した。

1) 山口県立山口博物館（天文）

1) Section of astronomy, Yamaguchi Museum

2 現存する山口県への落下隕石

山口県への隕石落下の記録や伝承の類はいくつもあるが（図1）、現在行方不明とされる隕石を除き実物が現存している県内落下隕石は、1897年（明治30年）に現在の山口市仁保中郷井開田及び宮野上（当時は吉敷郡仁保村及び宮野村）に落下し、直後に回収された仁保隕石（2号及び3号）と、1938年（昭和13年）に現在の岩国市周東町（当時は玖珂郡川越村）で地中から発見・回収された玖珂隕石の2種である。

このうち山口博物館が収蔵している県内落下隕石の実物は、仁保隕石3号（本体）及び玖珂隕石（切片標本）の2個であり（図2、3）、仁保隕石2号と玖珂隕石については、それぞれ本体のレプリカを収蔵している（図4、5）。仁保隕石3号、玖珂隕石（切片）の実物は、文献[1] [4] [5]及び[2][6][7]などに記されているように、山口博物館がその再発見に関わったことから収蔵できたようである。玖珂隕石のレプリカは、1994年に原標本を収蔵している国立科学博物館の好意により制作することができた。仁保隕石2号のレプリカについては制作年代や収蔵経緯は不明確だが、遅くとも1972年（昭和47年）には入手していたようである[4]。仁保隕石2号と玖珂隕石の実物本体は、いずれも国立科学博物館に収蔵されている（仁保隕石1号は国立科学博物館に収蔵されることなく、現在行方不明となっている）。

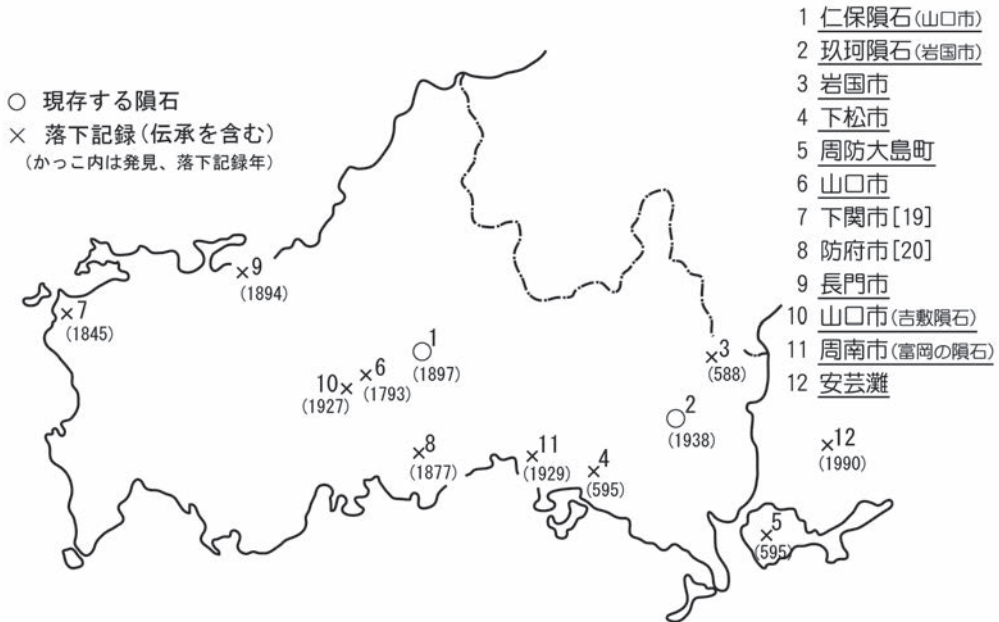


図1 山口県の隕石落下地と主な伝承・伝説地(○は現存隕石の落下地・発見地、×は伝承地等であり、本稿で扱った落下・伝承地等には隕石名や地名に下線を付している。地名の後の[]内の番号は、本稿末尾の引用文献番号を示す。

なお、いわゆる大英博物館の隕石目録[8]等で仁保隕石を“Nio”と表記しているのは、地域の人々が仁保を“にお”と発音していたことによる（今でも“にお”と呼ぶ人は稀ではない）。



図2 仁保隕石3号(石質隕石(コンドライト))。分析のため切断した後の現状(1.5×1.3×1.3cm)。



図3 玖珂隕石の実物切片(鉄隕石(オクタヘドライト)、2.2×1×0.7cm)。



図4 仁保隕石2号(レプリカ、7×4.5×3.5cm)。



図5 玖珂隕石(レプリカ、12.5cm×11cm×6cm)。

3 1966年以降の主な調査記録

1966年(昭和41年)刊行の「山口県の隕石について」[1]以降の県内落下隕石に関する主な調査記録を以下に記す(筆者以外の調査を含む)。

(1) 仁保隕石の落下当時の記録「奇石隕落詳細書」

仁保隕石落下時の詳細な記録としては、回収者の一人である阿土^{あづち}適太^{きた}の日記[4][9][5]や、阿土らと一緒に落下を目撃した高木^{たかぎ}九一^{くいち}の記録[10][9][5]のほかに、もう一人の回収者である桃林^{ももばやし}義景^{ぎけい}の記録などがある。このうち桃林の記録「奇石隕落詳細書」(図6)は、山口博物館でもその原本や写しを展示したことがあるが、文献等では紹介された例が無いようなので(一部は[11]に掲載されている)、ここに全文を引用しておく(横書きに改めた上、旧字やカタカナ等も適宜ひらがなに書き換え、句読点を加えた)。

<奇石隕落詳細書全文（注は筆者によるもので、■は判読できなかった箇所を示す。）>

明治30年8月8日、この日は非常の大暑にて、100度（注：華氏100度）内外の炎暑なり。此日、山口町42連隊（注：旧日本陸軍）営所落成に付、広島より兵士初めて入営あり。我等も歓迎の為、出山（注：山口町（旧）へ出向くこと）せり。当夜は天晴わたり只一点の雲なく、月潔え渡り、人皆家外に出て月をながめて納涼す。日中の炎熱忘れてとりどりの語いける内、俄然北の方面に雷の轟あり。是れが即ち真の夕立なると雑話する内に、あーら不思議なるかな、天地俄に変色して（ガス）の如く青色となりければ、人皆驚き天空を仰ぎ見れば、大なる火の玉、東方に向い走る。たちまち破裂して雷やむ。恰も花火の如し。世に流星と云うは蓋し是れなりや。それより瞬時にして奇音あり。恰も風の吹く時電柱の鳴る響の如し（ハーン■と云う凄き事云わん方なし。此音止む、瞬時に（シューと）空中を走る音あり。恰も流丸の通過する如し。空より何物か水田に落ちたり。一つは竹林に落ちてカラカラと竹に当たる音せり。之に恐れて家内に入り戸を閉じる者もあり。予と阿土適太、右墜落したる水田に至り、確にこの辺に落ちると認めたる所を見るに水濁れたる故、其処を探りみれば、泥掘れ凹になる故に手を入れみれば、堅き物あり。是をよく見れば焼石なり。いまだ暖気あり。之が水無き処なれば熱くして手に取りがたく、石の形状楕円にして外面赤黒く焼色なり。その欠損せる内面はやや淡灰色なる礫石様の質を帯び、凡そ長さ2寸5分、横1寸6分位にして、其量一つは52匁、一つは67匁5分の石2箇を発見せり。右現象に依れば古来云う所の隕石なるもの蓋し之ならんか。翌9日、巡查部長 小野寺慶吉 之を聞來り馳て帰り、其後、山口高等学校（注：旧制山口高校、現山口大学）理科教師 氏家謙曹氏來り馳て曰、之は地球破裂したるもの也、學術研究の貴長なるものに付、県庁へ出品すべしとの事に付、出せり。しかるに、その後東京帝国大学より山口県庁へ、大学へ出し呉との紹介有之。依て之を大学へ出品せり。大学総長より左の（注：本稿では下の）書面を送り來りぬ。只今にても大学に備え付あり。観覽を許さる。行て見る可し。後世紀念の為、書きしるし置もの也。（注：■箇所はハーンの重ね字か。）

左記の標品本学へ寄贈相成 正に領収 其厚意深謝之至に候 即ち本学に於て之を悠久に保存し学問の資料に可供候也

明治30年10月11日

東京帝国大学総長 濱尾 新 印

桃林義景殿

桃林義景は落下当時の^{しんぎょうじ}信行寺の住職（10世）であり、信行寺は隕石が落下した水田のすぐそばに建つ浄土真宗の寺院である（所在地は山口市仁保中郷井開田東）。なお、阿土適太日記には「（阿土自身が信行寺北西側の水田から拾った隕石1個のほかに）桃林義景が信行寺境内で1個を拾った」とあり、この「詳細書」にも信行寺の竹林に落ちたとも思われる記述がある。

(2) 仁保隕石落下時の見聞記録

山口博物館では、2018年（平成30年）12月に山口県出身の著名なアマチュア天文家・品川征志氏から、「隕石資料（1963 May 14 山口天文同好会）」と記された手書き資料のコピーを受

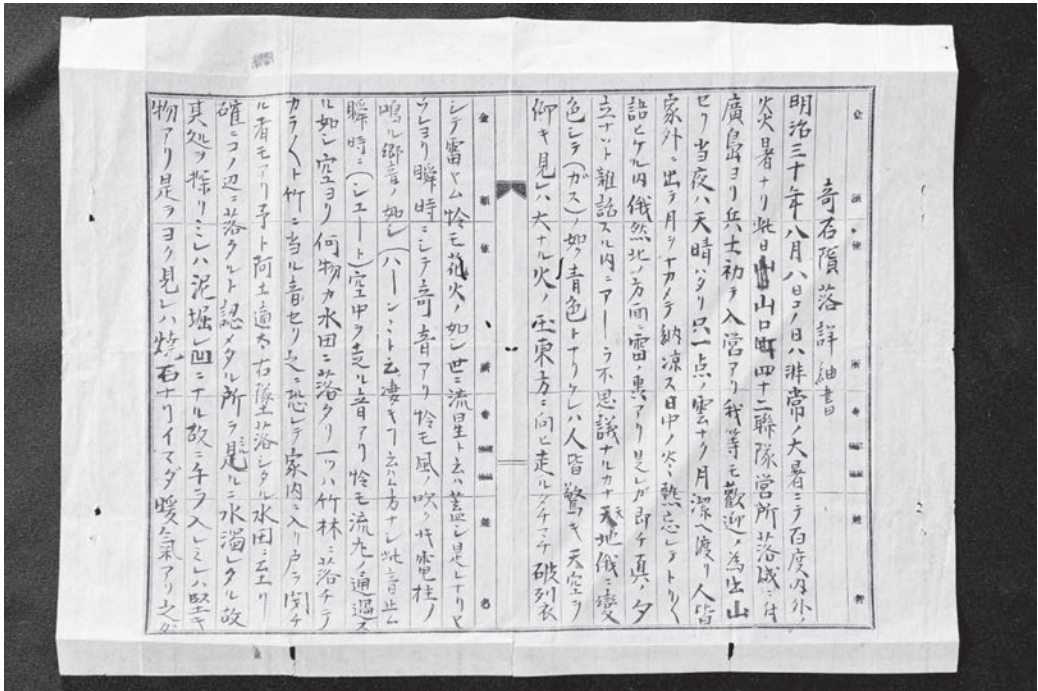


図6 奇石隕落詳細書(信行寺蔵)。詳細書は2枚続きで、これはその1枚目である。

領した。これは1963年（昭和38年）に山口博物館が開催した隕石展の際に、山口県及び九州各地から山口博物館へ寄せられた隕石に関する情報を取りまとめたものと思われる。山口天文同好会は後の山口県天文協会であり、当時から山口博物館の天文活動を援助していた。この資料の中には仁保隕石落下時の見聞と思われる記録が2件含まれていたもので、文意を保ったまま省除・整理して紹介する。

① 山口市西白石^{にししらいし}在住者（1963年当時78歳）の記録

自分は小郡町の生まれだが、12歳の頃、西向きの縁端で4、5人で夕涼みをしていた。向かって前の空から右斜めに、出始めの満月よりも少し大きめのものが蛍光を放ち、遠雷の底力を付けた様な音響をたてて地上に落ちてきた。

その時は辺り一面から地面に至るまで青白い世界となり、アレアレと皆が驚異の眼を見はった。時間は一瞬というよりも、ゆるい一瞬くらいだったように思う。その翌日、あれが隕石というもので仁保に落下し、土地の人が郡役所へ届けたということを知った。（筆者注：この記録には落下を目撃した場所は記されていないが、出身地の吉敷郡^{おごおり}小郡町（現・山口市小郡）での見聞であることが[2]の記述からわかる。なお、西白石は現在の白石3丁目付近にあたる。

② 大牟田市の内科医師（1885年（明治18年）生まれ）の記録

明治30年8月下旬、暑中休暇が終わりに近い頃だったと思う。私は当時13歳で郷里柳河原（高等）小学校3年生だった。当夜9時～10時頃までの間に、父親と共に自宅前の街路脇に縁台を置いて涼んでいた。突然向かい側の家の峯高く、東南の空より北方の光芒当て（マ

マ)、見たことのない普通の流星の幾百倍大のいわゆる火の玉が流れるのを仰いだ。数秒で消え、痕もなく、付近にでも落ちたのかくらいに考えていたが、休暇明けに先生から「山口県の山中に落ち、牧畜(羊の群れ)が多数死んだ」と聞いた。(筆者注:記録中の「柳河原(高等)小学校」は現在のいずれの学校にあたるか確認できなかったが、北原白秋と「同年同郷同級」などの記述もあるので(白秋は柳河高等小学校に入学)、現在の福岡県柳川市からの目撃記録であることは間違いないだろう。ただし目撃時期を8月下旬としているので、目撃した火球は、仁保隕石とは別の火球の可能性もある。なお「牧畜死亡」との記録は山口県内には残されておらず、噂の類と思われる。)

(3) 吉敷隕石

吉敷^{よしき}隕石(図1中の10)は、現在の山口市吉敷291(当時は吉敷郡吉敷村)に、1927年(昭和2年)4月28日に落下したとされ(落下目撃者からの聞き取りによる[3])、京都大学^{かぞん}花山天文台で行方不明になったとされている[8][12]。

この隕石は落下直後に回収され、その後に恵藤一郎に譲与されたようだ[3]。恵藤は当時良城小学校(現在の山口市立良城小学校)の校長で([3]に記載の吉敷小学校長は間違いと思われる)、その後山口県立教育博物館(現在の山口県立山口博物館)を経て、第二次大戦後は秋芳町立秋吉台科学博物館の初代館長に就任している[13]。恵藤は東亜天文学会(当時の名称は「天文同好会」、後に「東亜天文協会」)の活動を通じて、京都大学の山本一清(1929年から花山天文台初代台長)と繋がりがあったようで、この縁で吉敷隕石が花山天文台(現在の京都大学大学院理学研究科附属天文台花山天文台)に移されたものと筆者は推測している。花山ブレテン[12](図7)や大英博物館の隕石目録[8]には、1928年(昭和3年)6月25日落下と記載され、[3]の記述と一致しないが、いずれの目録にも1935年(昭和10年)に花山天文台にて行方不明とある。

吉敷隕石は神田茂の日本隕石一覧表[14]や国立科学博物館の日本の隕石リスト[15]などには記載がない。詳しい分析もなされていないようで、[8]にも単に「石質隕石」と記されているだけである。実物が行方不明となっている今では、本当に隕石だったかどうか確かめることができない。

(4) 富岡の隕石

1929年(昭和4年)10月23日、当時の都濃郡^{つの とみおか}富岡村字武井(現在の周南市大字^{しもかみ}下上)に隕石が落下したと伝えられる(図1中の11)。この隕石については、村岡、本によって簡単に紹介されているが[3][1]、実物は現存しない。本が記すように山口博物館には、その資料カードのみが残されている[1]。

その後の筆者の調査では、山口博物館の陳列品等分類簿(大正6年起)、第14回館報(昭和5年12月)の新寄贈品一覧(昭和4年11月から昭和5年10月までの寄贈品リスト)[16]にも富岡隕石が記載されていることを確認しており、回収後に山口博物館に入ったことは間違いないと思われる。陳列品等分類簿には「隕石、1個、都濃郡富岡村字武井へ昭和4年10月墜ちしものなり」と、第14回館報には「昭和4年10月23日午前9時、寄贈者屋敷内に墜ちしもの」と記されている。また、現存している資料カードには「隕石1個」「受入年月日:昭和5年1月20日」「昭和4年10月23日午前9時、都濃郡富岡村字武井、〇〇氏邸内に落下したるもの。長さ

No. 306. (Vol. 4.)		BULLETIN		October 4, 1935.				
Published by the Kwasan Observatory, Kyoto Imperial University, Japan.								
昭和十年十月四日 編輯・印刷・發行 “花山ブレットン” 京都帝國大學花山天文臺 (非賣品)								
Preliminary List of Meteorites in Japan. (日本に於ける隕星一覽表)								
The following is my preliminary list of meteorites in Japan, compiled during several past years. 下記は過去数年間に編作した隕星表である								
(Issei Yamamoto. 山本一清)								
List of Japanese Meteorites. (1935)								
No. 番號	Name 名稱	種類	S.G. 比重	Wight 重量 (g)	Size 大きさ (cm)	Locality 落下地名		
50-52	Niwo (1) 仁保 (2) Niwo (3) 仁保	spherical chondrite 球粒隕石		195 253	7×5×3.5	Yamaguti-ken 山口縣吉敷郡 仁保村井弱田		
97	Yosiki 吉敷		meteorite 隕石		0.12		3×.7	Yamaguti-ken 山口縣吉敷郡吉敷村
Fall (落下番號)	Date (日附)		Owner or Keeper (所有者) (保管者)	Remarks (備考)				
18	1897 Aug 8日 明治30年8月	Tokyo Science Museum 東京科學博物館	山口市にて閃光見ゆ					
"	" " "	Tokyo Imperial University 東大礦物教室	Mineralogy Inst.					
"	" " "	?	第50號の一部					
34	1928 June 25日 昭和3年6月	Missing (Kwasan Observatory) 花山にて行方不明	Mr. Y. Tanaka witnessed. 田中養介氏目撃					

図7 花山ブレットンNo.306(仁保隕石と吉敷隕石部分の抜粋)。この時点では珉隕石は未発見である。

1寸8分、幅1寸、厚さ4分、一部欠損し小破片となる」「寄贈者：〇〇」「第2号室第1号ケース陳列」との記載がある(筆者注：〇〇には寄贈者の氏名が記載されている)。

1985年(昭和60年)頃に現地調査を実施した松村巧氏は、回収者の近親者からの聞き取りとして「落下した隕石の半分を戦前、県の博物館に寄贈し、半分を自宅で保管していた。県の博物館に寄贈したものは太平洋戦争前後の混乱で行方不明になり、自宅に保管していたものも、その後行方不明になっていた」と記している[17]。また、反田一之による1991年(平成3年)の現地調査時の聞き取りでは(松村氏の聞き取り相手と同じ人物と思われる)、「屋根上に落下したいん石は、豆つぶ大の2個で、1個は県庁に提出し、1個は当家に保管していたが、家屋解体時に所在不明になった」とのことである[18]。反田氏(故人)は島根県桜江町(現・江津市)の人で、山口博物館からの情報などを基に、山口県落下隕石について精力的に調査に取り組まれていた。

なお、1990年に筆者が村岡豊氏(1960年~1965年にかけて山口博物館の天文・地学担当学芸員として在職)に電話で問い合わせたところ、「富岡隕石については資料カードの存在も知らず、もちろん実物は見たことがない」とのことであった。資料カードの裏面には村岡の後に山口博物館に着任した本のメモ書きがあり、「隕石本体は着任時には(すでに)無く、その後の整理時に資料カードだけが発見された」旨を記している。

山口博物館では第二次大戦の末期に資料を疎開させ、終戦後に再搬入するなど混乱の時期があった。その際に行方不明となった可能性は高いと思われる。この隕石については、科学的な分析がなされておらず、学界へも公表されていない（当然、[8]や国立科学博物館の隕石リスト[15]など、これまでの隕石目録には掲載がない）。吉敷隕石と同様に、本当に隕石であったかどうか、今となっては確かめることができない。

(5) 三隅村の隕石落下伝承

1894年～95年（明治27～28年）頃に、^{おおつ}^{みすみ} 大津郡三隅村（のち三隅町、現在は長門市）に隕石が落下したとの記録があり（図1中の9）、小川五郎は「当時三隅小学校長であった齋藤彦一先生からの直話」と記している（筆者注：三隅小学校は実在せず、明倫小学校（現・長門市立明倫小学校）の間違いであろう）[20][1]。比較的新しい事象でもあるので、1990年（平成2年）6月に筆者（松尾）が現地調査を行った。

三隅町公民館（三隅町社会教育課）の協力を得て、事前に関係者への連絡などもしてもらったが、残念ながら有効な情報は得られなかった。齋藤彦一氏の孫（当時60歳）の話では「祖父とは小学校4～5年生の1年間、山口市で一緒に生活していたが、隕石の話聞いたことがない」、また彦一氏の姉の孫にあたる三隅町会議員の話でも「自宅から彦一の家は100mほどしか離れていなかったので、よく遊びに行ってもよく話しましたが、隕石の話は記憶がない」とのことだった。三隅町にずっと在住している明倫小学校教頭（当時56歳）からは「慶応年間生まれで昭和30年代まで存命した祖父との話の中でも、隕石の話が出た記憶がない」「明倫小学校新築の際に理科標本も少し整理したが、はっきり隕石とわかるものはなかった」と話を聞いた。

その後1991年9月に、前述の反田一之氏から「三隅町の教育課長から人を紹介され、その人物から『隕石を拾った人が小学校へ持って行き、それを校長が県庁へ持って行った』との話を聞いた」旨の知らせを受けた。この情報は[18]にも記されている。

なお、齋藤彦一は1874年（明治7年）1月に三隅町（当時三隅上村）に生まれ、1889年（明治22年）3月に明倫小学校高等科を卒業し、すぐに母校明倫小学校の代用教員になった。その後山口師範学校を卒業し、1895年（明治28年）4月に明倫小学校の訓導、引き続き1897年（23歳）から同校校長を勤めた[21][22]。隕石落下が1895年であれば、明倫小学校の勤務時代と重なっていた可能性がある。

(6) 山口市吉敷中尾の隕石落下伝承と1990年の事象

山口市吉敷中尾の個人宅内に小さな祠（妙見社）があり、その由来記には「寛政4年12月22日の夜、吉敷郡中尾村百姓谷口喜右衛門の田地へ大星が降臨した」とある（図1中の6）。このことについては[23]にも簡単な記載があり、「吉敷のむかしーわたしたちの吉敷の伝説」にも記載されている[24]。1984年（昭和59年）に山口博物館の中島彰（当時の天文担当者）が調査に訪れたところ、この祠には長さ7cm程度（重さ310g）の小さな黒い石が祀られていた（図8、9）。中島はこの石に興味を持ち国立科学博物館の村山定男へも問い合わせをしたようだが、隕石ではないとの結論に達している。

この中尾の妙見社については、1991年（平成3年）9月に反田も調査に訪れており、その際に妙見社がある家の夫人から奇妙な話を聞いている。「1990年8月上旬の夜9時頃、南東より青白色の火球が流れ、その直後に妙見社の前庭に親指の先くらの赤茶けた物が落ち、くるく



図8 山口市吉敷中尾の祠(1984年頃、中島彰撮影)

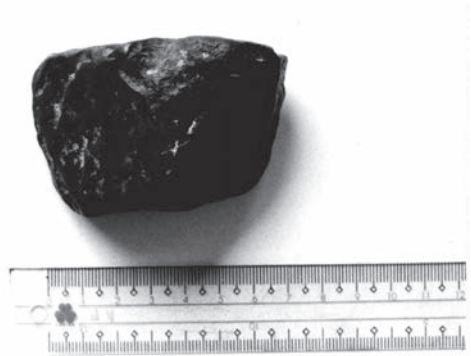


図9 祠にあった石(1984年頃、中島彰撮影)

ると回った。夫がゴルフ球の焼けたものだと言い、気味悪く思ったので、その場にそのまま放置した」というのである[18]。この話の方がよほど隕石かもしれないと思われるが、その後の調査に至らず不明のままである。

(7) 山口県神社誌に記載されている隕石落下伝承

中島彰は1985年（昭和60年）前後に、隕石伝承の調査過程で山口県神社誌[25]から妙見社関連の由来をいくつも書き出している。このうち隕石落下とも受け取られる伝承を、ここに記しておく（各神社の所在地は神社誌記載のもの）。

① 志度石神社（大島郡大島町東屋代神領）

もと北辰妙見宮と称し、推古天皇3年、大星志度石の峯に降臨。属星八神も祀る。（図1中の5）

② 速田神社（玖珂郡美和町大字阿賀432）

崇峻天皇元年秋、空に光あり藤木の田に落ち、宗形の大明神顕はれ、この里の民を守らんと垂示あって・・・（以下略）。宝物 一六善神一軸、神光石一個。（図1中の3）

③ 降松神社（下松市大字河内1984）

推古天皇4年9月18日、鷲頭の庄青柳浦の松樹に降臨あり、古く妙見社の名あり。（図1中の4）（筆者注：伝説による下松の隕石落下年は、推古天皇3年（595年）または17年（609年）とされることが多い（[3]ほか）。）

(8) 速田神社の隕石落下伝承

前記(7)②の速田神社の光物については「社伝に曰く・・・」として、防長風土注進案（奥山代宰判 阿賀村）にも記されている[26]。反田一之は1991年（平成3年）に速田神社を調査し、秋大祭の折に拝観した宝物（神光石）は石灰岩だったとのことである（フズリナ類の化石が認められた）[27]。この神光石については、松村巧氏もその著書[17]（16～18ページ）で詳述しており、やはり隕石ではないとのことであった。

(9) 隕石発見や隕石落下伝承の調査の呼びかけ

山口博物館では1990年（平成2年）9月～10月にテーマ展「鉱物・隕石」を開催した[28]。長い年月で考えると山口県内には、仁保隕石、玖珂隕石以外にも多数の隕石が落下しているはずなので、テーマ展の開催に際して「隕石発見調査に協力を」との呼びかけを、マスコミを通じて行った。ちょうど開催直前に山口県付近で隕石落下と思われる事象があったため（次節参照）、いくつものマスコミに取り上げてもらうことができた。

テーマ展前後の期間中に十数件の情報提供や隕石との伝承を持つ石の持ち込みがあったが、残念ながら隕石の新発見につながる情報は得られず、持ち込まれた石のいずれも隕石とは異なっていた（一点のみ古美術商と思われる人から持ち込まれた石は、本物の隕石の可能性があった）。

4 安芸灘への隕石落下

1990年（平成2年）8月6日の夕刻、新聞記者から松尾の自宅へ「今日14時頃、阿武郡旭村（現・萩市）の男岳おんたけに金色に光る物体が落ちて、白い煙が立ち上がった」との一報が入った。飛行機等の墜落でないことは記者が把握しており、隕石落下の可能性があるので直ちに情報収集を始めた。山口博物館へはマスコミ各社、全国の天文関係者、一般県民等から多数の情報がもたらされた。初期の情報からは山口県内への落下が疑われ、山口博物館でも山口県天文協会（山口県内のアマチュア天文家の団体）と協力して、詳細情報の収集と隕石の捜索に当たった。さらに測量士の協力も得て、目撃高度や方位の測定も実施した。

その結果、おそらく屋代島やしよじま（周防大島）の北東方の海上（安芸灘）に落下したと考えられたため、それ以上の隕石捜索は断念した。その後は現在に至るまで、この隕石発見の報告はない。今後同様の事象が生じた際の参考にもなると考え、この時に収集した目撃記録や情報を少し詳しく記す。

(1) 山口博物館が直接収集した目撃記録・情報

山口博物館へ直接寄せられた目撃情報や電話等で問い合わせた情報のうち、主なものは次のとおりである。

① 旭村あきらぎ明木の男岳山麓にて（旭村職員および建設会社社員、複数）

A氏：旭村の職員の人々が「白い光るようなものが落ちた」と言ったので、空を見ると燃えた煙のようなものが丸くかたまっていた。普通の雲や飛行機雲のようではない。高度は45度くらいで音はしなかった。

B氏：煙のようなものがずっと遠くに見えた。下から上に上がるようだった。初めて男岳に登ったので方角はわからない。

C氏：下から上に上がるようではなく、空にぽかっと見えた。（筆者注：C氏については福永泰俊氏（山口県天文協会会員）の聞き取りによる。）

② 旭村立佐々ささなみ並小学校にて（同校4年生、複数）

同校教諭を通じて：空から山の方に落ちて、最後に光が強くなって、光が消えて爆発したような白い煙が見えた。黒いかけらが落ちていった。仰角は10～15度くらい。

③ 旭村佐々並付近で車の運転中に

国道262号線を山口方面へ走っていた時に、ミサイルのような感じで光るものが飛んで、最後に光が強くなって、見えなくなったところに煙が残っていた。落下物は見えなかった。北から南へ飛んで行った。仰角は15度くらい。

④ 阿武郡阿東町立阿東中学校にて (野球部生徒、複数)

14時30分頃、東から少し北寄りですトリウムを燃やしたような光が落ちてきた。光が消えたところで煙が丸くふくらんだ。落下物は見えず、音もしなかった。高度は35～45度くらい。

⑤ 玖珂郡由宇町銭壺山 (現・岩国市) にて (由宇中学校教諭、複数)

A氏：雷のようなゴゴゴゴ (ゴロゴロではなく) という音を聞いた。別の教員が「あれは何か」と言ったので空を見上げると、東の方向の高度75度くらいに爆発したような雲があった。米軍基地関係の爆発かとも思い、岩国警察署にも連絡した。

B氏：14時30分頃、ドーンという音がして、上空に煙が丸くかたまっような感じのものが見えた。飛行機が爆発したのかと思った。高度は真上に近い (仰角50～60度) が、東～東北東という方向はわかる程度の高さ (方向は時計に付いているコンパスで測定した)。物体や光は見えていない。

⑥ 大島郡東和町立油田中学校 (現在は閉校) にて (陸上部2年生)

顧問教諭を通じて：8月6日の昼頃に見た。北の方向で仰角は45～50度くらい。

⑦ 兵庫県明石市立天文科学館職員から

広島県尾道市でも音が聞こえた。広島市では音を聞いた人はいるが、今のところ (8月7日16時) 光を見たという情報は無い。

⑧ 大阪から熊本へ向かって飛行中の航空機から (全日空機の航空機関士)

松山にかかる手前、今治上空付近で進行方向 (機首は旧大分空港に向く) 1時の方向に雲が見えた。雲の高さは飛行機よりも相当高いように感じた。光るものや落下物は見えていない。雲がじーっと出てくるのを見た。

⑨ 阿武郡阿武町田部にて (阿武町職員)

阿武町田部 (JR山陰本線の木与駅～宇田郷駅の間) の磯で、ボートから山の方 (東方向) に白い煙を見た。

⑩ 鳥取県日南町にて (山口県警職員)

国道180号線を走行中、前方にバレーボールくらいの大きさのものが金銀色に花火のように一瞬輝いて無くなった。下に落ちる感じだった。時刻は13時45分頃、南西の方向に見えた。

⑪ 新聞記者 (読売新聞) から

広島県倉橋島から西に見えた。その他に広島県で3か所、山口県で1か所、松山で1か所の目撃情報がある。

⑫ 広島市こども文化科学館職員から

広島市内でも音を聞いた人は多い。宮島から「分裂するのを見た」という人がいる。

⑬ 藤山康夫氏 (山口県天文協会会員) から

山陽国策パルプ (現・日本製紙) 岩国工場で、パトロール中の人に変な雲を見ている。手を伸ばして拳くらいの大きさで、やや黄色の白い丸い雲。しばらく形を変えなかった。南東方向で仰角45度くらいとのこと。

由宇小学校グラウンドで作業中の人が目撃している。それほど大きくないが音が聞こえた。昼

間の花火の雲を大きくしたような雲が見えた。南東の方向で仰角70～80度くらいかとのこと。

⑭ 小林正照氏（山口県天文協会会員）から

下関で目撃者がいる。金属が反射したような光が、北から南へ流星のように飛んだ。非常に速い。消える瞬間に光ったが煙は見えなかった。高度は45度くらいとのこと。門司（北九州市）でも同様の目撃者がいる。

⑮ 岩国市立柱島中学校（現在は休校中）から

柱島（屋代島東端北方の島）で音を聞いた人はいるが、目撃者はいない。

⑯ 東京大学地震研究所白木しらき微小地震観測所（広島市安佐北区）職員から

付近の6か所の地震計の観測結果の解析では、落下地点は東経132度24分40秒、北緯34度03分57秒、時刻は8月6日13時43分49秒（衝撃波が地上に届いた時刻の可能性あり）。進入は北北東（北から東へ23.6度）の方向から、進入角度は地表面から55.7度。ただしこれらは暫定のものであり、公式・正確な数値ではない。

(2) 測量士と共に収集した情報

測量士（瀬口哲義氏）の協力が得られることとなったため、9月2日に瀬口氏と松尾の二人で現地調査に出かけた（図10）。その時に聞き取った目撃情報と測量結果は次のとおり。

① 東和町（現・周防大島町）和田にて

火の玉が燃え広がるようだった。燃える色はオレンジ色。火の玉の直径は2～3度か。目撃者の示す方向は北から東へ35度ほど、高度は55度前後。



図10 目撃者と測量士で高度・方位を測量(1990年9月)。

② 東和町和田にて（寺院境内）

黒～灰色の煙が見えた。煙はゆっくり西へ動いていった。目撃者の示す方向は、最初に煙を見た時は北から2度東、高度は54度くらい。その10分ほど後では、北から西へ14度、高度は同じく54度くらい。

③ 東和町立油田中学校にて（(1)⑥の陸上部生徒）

音がしたので空を見たら、黒～灰色の煙が見えた。目撃者の示す方向は、北から東へ25度前後、高度は22～23度。

④ 由宇町立由宇小学校にて

音がしたので見上げると、白い煙があって少し広がっている感じだった。直径は1度くらい。動きは不明。目撃者の示す方向は北から東へ75度くらい、高度は33～34度。

(3) 山口県天文協会を通じて得た目撃情報

山口県天文協会では、この火球目撃直後から情報の取りまとめと隕石搜索のために、何度も会員が参集し会議を開いている。この会議には松尾も参加し、多くの情報を得ることができた。以下のうち①～⑤については、現地にて会員の金子芳文氏、川崎拓彦氏が、目撃者から直接聞き取ったものである（金子氏記録）。

① 大島郡大島町（現・周防大島町）西三蒲蔵本にて（大島漁協職員）

8月6日13時30分から14時の間だと思うが、バーンと爆弾が破裂したような大きな音を聞いた。5分くらい経って自宅から外に出て空を見上げると、東から北へ40度前後の方向で仰角70度前後のところに、たばこの煙の輪のような雲が浮かんでいた。雲の輪の直径は約6度くらい。天気は快晴で空は澄んでいた。

② 由宇町（現・岩国市由宇町）にて（元自衛隊員）

8月6日午後、由宇駅東方の防衛施設庁官舎付近でクレーン作業をしていた。上に電線があるので、それに引っかけないように注意していたところ、オレンジ色のかなり大きな明るい飛行物体が、北東方向から南東方向へかなり早いスピードで飛んできた。真東からやや北寄りの地点で爆発し、発光後すぐ白煙を上げた。落下物は無かった。煙は徐々に拡散し薄れていったが、5分くらい見えた。もう一人の作業員も煙は見ている。音はしたかもしれないが、重機の音で聞こえなかった。てっきり飛行機が落ちたと思った。

③ 大島警察署および東和町（現・周防大島町）伊保田派出所にて

柳井海上保安署からの照会で、警察でも広島県の倉橋島付近に落下したと思われる隕石についての目撃者を捜しているが、現在のところ目撃者は見つかっていない。

④ 東和町伊保田にて

A氏：室内で勤務中に雷のような音を聞いた。こんな良い天気なのに雷とはおかしいと思ったが、外に出て見ることはしなかった。

B氏：音は聞いたがそれほど気にするような音でもなかったもので、外に出るようなことはしなかった。

⑤ 柳井市にて（大島郡^{たちばな}橋町（現・周防大島町）職員）

柳井市北東部の柳井カントリークラブにいた時、大きな音がしたので空を見上げると、空に雲のようなものが浮かんでいた。方角は全くわからない。自分以外にも10人余の人が見たと思う。

⑥ 宇部市^{にしきわ}西岐波にて

広島方向に見えた。左から右へ飛んだ。光って白い尾を引いた。（宇部ではその他に2件の目撃情報あり。いずれも14時～14時30分頃）

⑦ 島根県桜江町（現・江津市）にて

南東の方向に光るものを見た

⑧ 広島（個人）からの情報

広島では真上に見えた。地震計の観測データから計算したところ、宮島（厳島）の南、大島（屋代島）の東の海域に落下したものと思われる。これは広島各地点の報告とも合致する。

⑨ L A T（低高度人工衛星追跡ネットワーク）からの情報

人工衛星落下である可能性は全く無い。

以上の目撃情報のうち雲や煙が見えたという方向は、ほとんどの場合方位磁針も持たずに感覚に頼るものなのでばらつきも大きいですが、落下地点は周防大島（屋代島）東端の北方海域と考えて矛盾はないように思える。情報収集の過程では、県中央部の旭村のすぐ近くに落下したという初期情報にもかかわらず、どこまで東へ行っても雲（煙）の目撃方向（東～南東）が変わらないまま県東端（由宇町や岩国市）にまでたどり着き、その後周防大島で目撃方向が急激に

北方へ変化したことが印象的であった。

(4) 新聞記事など

この火球（おそらく隕石落下）は昼間の現象ではあったが、多数の人が目撃しており、写真も撮影されていることから、多くの新聞で報じられ天文雑誌にも掲載された。そのいくつかをここに記録しておく（全国紙については西部本社発行版である）。「 」内は記事の見出しで、*印は隕石落下雲の写真が掲載されている記事である（山口博物館も撮影者から同じ写真の寄贈を受けている）。

- 毎日新聞 8月7日「隕石が落下？ 山口県で目撃相次ぐ 一時、航空機墜落騒ぎも」
 *読売新聞 8月7日「イン石キャッチ 白昼、中国山地に落下」（1面）
 読売新聞 8月7日「おおイン石だ!! 仰天 夏の怪 白煙大音響 機長らも見た
 中国地方各地で目撃」（23面）
 朝日新聞 8月8日「「光る物体」はやはりいん石？ 山口県で調査」
 西日本新聞 8月8日「山口にいん石落下!? 天文マニアが山中捜索」
 中国新聞 8月8日「金色の物体はいん石落下か 山口で調査始まる」
 山口新聞 8月10日「いん石 WANTED 県天文協会」
 毎日新聞 8月10日（山口版）「イン石は大島郡東方海上に？ 県天文協会が発表」
 中国新聞 8月10日「いん石 安芸灘付近に落下？ 広島・山口天文協会 目撃証言から分析」
 *スカイウォッチャー 1990年10月号 p.45「隕石落下が目撃された！」
 *スカイウォッチャー 1991年1月号 p.5「隕石落下が目撃された」

5 仁保隕石4号の可能性と熊本の怪火現象

(1) 仁保隕石4号の可能性

2018年4月に京都市在住の篠田皎氏から、「今のところ仁保隕石は3個回収となっているが、東京日日新聞の1897年8月18日号では、宮野村で3個拾った者がいたと伝えている」との知らせを受けた。篠田氏は流星や隕石に関連した現象に興味を持ち、全国の新新聞・雑誌記事を多数収集されている。山口博物館でも仁保隕石落下当時の新聞記事を収集しているが（図11）、この新聞記事の存在については初耳であった。また、仁保隕石に関しては山口県内で多数の報告が刊行されているが、宮野での隕石発見については仁保隕石3号以外に紹介されたことがない。すぐに国会図書館に依頼し該当記事の写しを入手した。村山定男の「隕石の旅（8）」[5]に、理学界第8巻「美濃隕石附日本隕石略説」（1911年（明治44年）、脇水鉄五郎著）の記事として引用されている「横地氏の説によれば、仁保村以外にも同時に2、3の隕石発見せられたりと云う」は、この新聞記事のことかと思われる。

この「隕石の発見」と題された東京日日新聞の記事全文（図12）は、「このほど本紙に記載せし山口県の隕石は、その後山口警察署にては各所に隕石を拾いたる者ありと聞き、過日來搜索中なりしが、吉敷郡宮野村に於いて1個12~13匁くらいの隕石3個を拾いたる者ありたれば、これを警察署に保存して一般人民に縦覧せしめつつありと言う」であり（旧字は改めた）、冒頭の「このほど本紙に記載せし」とは、仁保隕石落下の前報（図11）のことである。

●流星水に隕つ 去る八日午後十時廿二分山口縣
 吉敷郡仁保村字井開田の水田中に一ヶの流星墜落
 したる由なるが今其模様を記さんに同夜は風なく
 雲なく群星輝々として光を争ひ居たるが午後十時
 頃一個の流星漸次其光輝と大さを増しつゝ西南
 より東北に向つて進行し見る／＼月と大さを争ふ
 程になり四方に烟花の如き火花を發散し始め奇觀
 言はん方なく其光輝月よりも強くして十里の山河
 盡よりも明なり斯くて其流星は次第に大きを減じ
 行き遂に全く消滅せしが消滅後一分時許りにして
 前記仁保村の方に當りて一大徑響を聞きたり其時
 同村民は物ありて水田中に落ちしを見たりと言へ
 り是を以て其翌日其水田中を檢せしに同地方にて
 は未だ曾て見掛けざる二個の異石あり二個共に異
 黒にして一は直徑二寸五六分目方六十七分五分、
 一は直徑一寸五六分目方五十二分あり其缺損した
 る箇處より其内部を檢せしに内部は灰白色にして
 花崗石の如き斑點ありて同石よりは少しく軟質な
 りき而して此隕石は目下山口縣廳にて保存し居れ
 ると同地より通信ありたり

図11 仁保隕石の落下を伝える当時の新聞記事の一例(東京日日新聞(現在の毎日新聞) 8月14日号[29])。)

山口博物館ではこの新聞記事をもとに、「宮野で仁保3号以外に隕石が拾われている可能性がある。何かの言い伝え等があれば、山口博物館に情報を寄せて欲しい!」とのニュースを天文展示室に掲出した。ちょうどこの年の夏の特別展では、仁保隕石2号と玖珂隕石の実物を国立科学博物館から借用して展示することになっていたので[31]、特別展の紹介に併せて、マスコミでもこの記事について紹介してもらった。また、宮野小学校、宮野中学校の教員を通じて地元にも呼びかけたが、現在のところ得られた情報はない。

この記事とは全く別に、2015年頃に「(仁保隕石3号以外に)宮野で回収されたと伝えられる隕石が現存している」との情報も聞き及んでおり、今後仁保隕石4号が(あるいは5号も)発見される可能性がある。三浦によると仁保隕石は隕石シャワーとして地球に衝突したとのことだが[32]、回収された3個だけでなくさらに仁保隕石が発見されれば、まさにシャワーのように降ってきたと言えるだろう。

なお、篠田氏からの情報を受け、他にも同様の新聞記事が存在する可能性があると考え、国会図書館(本館)を3度、東京都立中央図書館を1度訪れ、仁保隕石落下当時の各種新聞を子細に閲覧したが、東京日日新聞8月18日号の他には、仁保井開田で回収された2個以外の隕石について言及している記事は発見できなかった(5月には篠田氏からも多数の仁

●隕石の発見 此程本紙に記載せし山口縣の隕石
 は其後山口警察署にては各所に隕石を拾ひたるも
 のありたりと聞き過日來搜索中なりしが吉敷郡宮
 野村に於て一個十二三匁位の隕石三個を拾ひたる
 ものありたれば之を警察署に保存して一般人民に
 縦覽せしめつゝありと云ふ

図12 東京日日新聞1897年8月18日号[30]。

保隕石に関する新聞記事の写しをお送りいただいたが、その中にも存在しなかった)。

(2) 熊本の怪火現象

篠田氏から送られた新聞記事の中には、仁保隕石落下と同日のほぼ同時刻に九州の熊本市で発生した怪火現象の新聞記事も多数含まれていた。記事の中には隕石落下そのものではないかと思われるものさえあり、かつ仁保への隕石落下よりも大きな現象のようにも思える(実際には隕石は発見されていない)。不思議なことに仁保隕石に関するこれまでの山口県内の調査報告では、神田によるもの[33]以外に熊本の怪火現象に触れたものを見かけず、村山の「隕石の旅(8)」[5]でも紹介されていない(村岡の報告[2]を引用しつつ、熊本市から火球が見えたことは記している)。

仁保隕石の落下経路は「熊本方面から山口へ」と考えても矛盾はないようなので[2][32]、仁保隕石は「熊本から山口にかけての壮大な隕石シャワー」だったとすれば興味深いが、一般に隕石シャワーは手前で落下する隕石ほど小さく、シャワーの先端ほど大きい隕石となるので、新聞記事から読み取れる範囲では(熊本の現象の方が大きく感じるので)これと矛盾する。隕石の専門家からは「同一隕石の落下現象と考えるには、熊本市と山口市では距離が離れ過ぎている」との指摘も受けた。いずれにせよ2つの事象の時刻が極めて接近していることから、前述の国会図書館での調査の際には熊本の怪火現象についての新聞記事も収集した。

収集した新聞記事のうち、「天火飛んで病院を砕く」と題した九州日日新聞(現在の熊本日日新聞)1897年8月10日号の記事(図13、14)を、以下に少し要約して記す。

「昨夜午後10時20分頃、熊本市の南天から、流星のようなもの(俗に天火)が現れた。その色は淡青色で、非常な速さで市の中央を通過し、北方の市外に飛んで行ったところで一層の光炎を放って月光をしのぐほどになった。同時に数個に爆発して光炎が赤色に変わって、すぐに消えた。このことは昼間の残暑を避けようと市内各町で置き座を出して涼を採っている人々の多くが目撃しており、何かが電気的作用のような火の尾を流して中天を飛んだことは事実である。

それに関係しているかどうか、すぐには信じることができないが、天火の通過と同時に天火通過の下にあたる県立熊本病院の死体解剖室の4割程度が、雷が落ちたような響きのうちに全く破壊し、梁は折れ、柱が裂け、瓦が飛び、壁は崩れたとのこと。ところが破壊した他の大部分はそれほど影響を受けず、わずかに棟が前面に傾いた程度に過ぎないのは不思議である。

解剖室壊裂の原因については種々取り沙汰されているが、一方ではこの解剖室は明治10年建築のとても粗造な



図13 熊本怪火の新聞記事の一例(九州日日新聞 1897年8月10日号(記事の前半部分)[34])。



図14 熊本怪火の新聞記事の一例(九州日日新聞 1897年8月10日号(図13の続き)[34])。

もので、その上用材の要部が多少腐朽していたために自然倒壊したものである。いづれも根拠のない憶測に過ぎず、未だ原因は不明である。」

この九州日日の記事は、福岡日日新聞(現在の西日本新聞)8月11日号に転載されている[35]。村岡の報告[2]でも福岡日日のこの記事を用いているが、引用は上記要約の第一段落の一部で、その後記されている熊本で発生していた事件(解剖室の破壊)については全く触れていない。また筆者の調査の範囲では、この怪火現象についての九州日日や福岡日日の続報は見当たらなかった。

6 二つの隕石記念碑

隕石の落下地に地元住民らによって記念碑が造られることは珍しくないが[36]、1990年代に入って仁保隕石の落下地に、次いで玖珂隕石の発見地にも、それぞれ記念碑が建立された。

(1) 仁保隕石落下100周年記念碑

1995年(平成7年)、落下100周年を前に「仁保隕石落下100周年記念碑」が山口市仁保中郷の信行寺境内に建立され[37]、翌年6月に信行寺の門徒等により除幕式が行われた。この碑は信行寺の先代住職(12世)桃林叔房によって建立されたもので、信行寺本堂の北西側に建つ(仁保隕石と信行寺、桃林氏との関連は3節(1)を参照)。この記念碑は、本体が幅1.6m、高さ1.5mほどの石造りで、隕石が落下してきた方向や、およその落下角度(いずれも推定)が示されている(図15)。また、落下100周年を記念して、仁保隕石落下時の状況などを解説した「宇宙からのロマンの使者」という美しい小冊子が、山口信用金庫から発行された[11]。なお、仁保隕石のうち3号の落下地(山口市宮野上、図16)には、記念碑や標示柱などはまだない。



図15 仁保隕石落下100周年記念碑(信行寺境内、2019年12月撮影)。

(2) 玖珂隕石発見地の碑

玖珂隕石が発見された地元の玖珂郡周東町（現・岩国市周東町）では、「玖珂隕石の存在を再び世に訴えよう」「町の誇りを形にして残したい」と発見地の地区有志が集まり、2004年（平成16年）に「風止地区で発見された玖珂隕石に光をあてる会」（通称「風止会」、会員53名）が発足した。この会では、記念碑の建立や道路案内板の設置、玖珂隕石のレプリカ作成などをめざした[38]。市町村合併（いわゆる平成の大合併）の前に碑を建てないと忘れられてしまうと活動を急ぎ、会費や寄付で約50万円を集め、同年8月には記念碑が完成した（周東町と岩国市との合併は2006年3月）。

石造りの記念碑は、縦60cm、横70cmで、「玖珂隕石発見地」と大きな刻字があり、発見日の「1938.1.10.」なども刻まれている。傍らには発見の経緯などを記した説明板も設置され、同月29日の除幕式には、会員や住民、天文ファンら約50人が出席し、完成を祝った[39～41]。除幕式には松尾も出席したが、前日には玖珂隕石の再発見に貢献した藤井旭氏の講演や天体観望会が開催されるなど、盛大なものであった。

その後「玖珂隕石の実物のイメージがわからない」などの声が寄せられたことから、2010年には隕石の写真を陶板に焼き付けた碑の新設を決め、再び賛助金集めを始めた[42]。この新しい碑は2011年3月に完成している（図17）。玖珂隕石碑の建立については新聞各紙でも多数報道された[38～42]。なお、玖珂隕石の発見や再発見の経緯については、文献[2][6][7][43][44]などを参照されたい。



図16 仁保隕石3号落下地(山口市宮野上河原、2020年1月撮影)。左手の家屋(隕石回収者の柴崎家)付近に落下したと伝えられる[1]。



図17 玖珂隕石発見地の碑(岩国市周東町川上風止地区、2012年1月撮影)。

7 おわりに

隕石の落下は自然現象ではあるが、空から石が降ってくるなど希有な出来事であり、落下地では正に奇跡的な大事件となる。その時の光景や鳴動など、人々に与える衝撃も余りに大きい。このため隕石の落下は永く語り継がれ、さらには伝説にもなり、地域の文化に影響を与えて現代に生き続けている。本稿が今後の県内落下隕石の調査や星の文化の調査に役立てば幸いである。近年、仁保隕石碑、玖珂隕石碑が建立され、二つの隕石のことが地域にしっかりと刻まれたことを嬉しく思う。いずれ宮野にも記念碑が建立され、また仁保隕石4号が再発見されるこ

とを願っている。

本稿をまとめるにあたり、篠田^{こうぼう}皎、桃林宏房（信行寺現住職）、川本典康（風子会）の各氏を始め、多くの方々にお世話になった。お礼を申し上げる。

引用文献

- [1] 本 国丸、1966、「山口県の隕石について」、山口県の自然、No.16、26-28、山口県立山口博物館。
- [2] 村岡 豊、1963、「山口県の隕石(Ⅰ)」、山口県の自然、No.10、22-25、山口県立山口博物館。
- [3] 村岡 豊、1964、「山口県の隕石(Ⅱ)」、山口県の自然、No.11、13-15、山口県立山口博物館。
- [4] 陶山義仁、1972、「山口の隕石」、ふるさと山口、第4号、1-2、山口の文化財を守る会。
- [5] 村山定男、1992、「隕石の旅(8)(仁保隕石)」、星の手帳、Vol.57(1992年夏号)、71-75、河出書房新社。
- [6] 村山定男、1965、「玖珂隕鉄の新標本」、自然科学と博物館、Vol.32、No.3-4、46-49、国立科学博物館。
- [7] 村山定男、1991、「隕石の旅(5)(玖珂隕鉄)」、星の手帳、Vol.54(1991年秋号)、72-76、河出書房新社。
- [8] Grady.M.M.、2000、“Catalogue of Meteorites”(5th ed.)、Cambridge。
- [9] 仁保の郷土史編纂委員会(編)、1987、「仁保隕石とミステリー」、仁保の郷土史、191-196、仁保の郷土史刊行会(仁保公民館)。
- [10] 高木九一、1951、郷土誌 仁保の今昔、486-488、村誌刊行会。
- [11] 和田健・横田博、1997、宇宙からのロマンの使者－仁保隕石落下100周年記念－、山口信用金庫。
- [12] 山本一清、1935、“Preliminary List of Meteorites in Japan”(日本に於ける隕星一覧表)、Bulletin(花山プレテン)、No.306、2-7、京都帝国大学花山天文台。
- [13] 松尾厚・岩村和政、2020、「山口県立山口博物館の天文活動95年」、山口県立山口博物館研究報告、No.46、1-16。
- [14] 神田 茂、1933、「日本隕石一覧表」、天文月報、Vol.26、No.6、101-105、日本天文学会。
- [15] 国立科学博物館、日本の隕石リスト、https://www.kahaku.go.jp/research/db/science_engineering/inseki/inseki_list.html
- [16] 山口県立教育博物館、1930、本館第14回報告、31-32。
- [17] 松村 巧、1987、「(11) 神光石」「(20) 富岡に落ちた石」、天文史跡調査余話1982-87、16-18及び29-30、私家版。
- [18] 反田一之、1991、星の地名考(いん石飛来を尋ねて)No. 3 -山口県の隕石-、私家版。
- [19] 小川五郎、1963、「巨星隕つ」、山口県の自然、No.9、7-10、山口県立山口博物館。
- [20] 小川五郎、1965、「続 巨星隕つ」、山口県の自然、No.14、4、山口県立山口博物館。
- [21] 齊藤彦一、1964、「歴代校長の回顧録」、明倫小学校80年の歩み、13-19、三隅町立明倫小学校。
- [22] 編集委員会(監)、1973、「三隅町の歴史と民俗」、744-746、三隅町。
- [23] 山口県立山口博物館、1963、隕石展(山口博物館展覧会解説書)。

- [24] 田中行成、1977、「吉敷のむかし－わたしたちの吉敷の伝説－」、11、私家版。
- [25] 上山 昇、1972、山口県神社誌、12、49-50、95、山口県神社庁。
- [26] 山口県文書館(編)、1962、防長風土注進案、第3巻 奥山代宰判、108-111、山口県立山口図書館。
- [27] 反田一之、1993、「速田神社の宝物」、星の地名考(いん石飛来を尋ねて)No. 4、1-2、私家版。
- [28] 山口県立山口博物館、1990、テーマ展 鉱物・隕石(テーマ展出品目録)。
- [29] 東京日日新聞、1897、地方雑事「流星水に隕つ」、8月14日号、4。
- [30] 東京日日新聞、1897、地方雑事「隕石の発見」、8月18日号、4。
- [31] 杉江喜寿ほか、2019、「2018年度特別展 『夢・未来・そして宇宙へ！宇宙兄弟展2018×やまぐちと宇宙』の概要報告」、山口県立山口博物館研究報告、No.45、21-37。
- [32] 三浦保範、1991、「山口県の隕石 - 1 -」、山口県の自然、No.51、1-8、山口県立山口博物館。
- [33] 神田 茂、1960、「仁保いん石資料」、The Star(山口天文同好会誌)、No.21、6-10。
- [34] 九州日日新聞、1897、「天火飛んで病院を砕く」、8月10日号、2。
- [35] 福岡日日新聞、1897、「天火飛んで病院を砕く」、8月11日号、5。
- [36] 松尾厚ほか、2006、「日本の天文史跡目録」、山口県立山口博物館研究報告、No.32、35-60。
- [37] 毎日新聞(西部本社版)、1995、「雑記帳」、5月30日号、23。
- [38] 防長新聞、2004、「玖珂隕石に光当てよう」、6月4日号、7。
- [39] 読売新聞、2004、「地元有志ら記念碑建立」、8月31日号、34(山口地方面)。
- [40] 中国新聞、2004、「玖珂隕鉄 町の誇りに」、8月30日号、24(周南・山口地方面)。
- [41] 山口新聞、2004、「発見地の碑除幕」、8月30日号、15(県総合面)。
- [42] 中国新聞、2010、「玖珂隕石 新たな石碑を」、12月30日号、17(岩国・柳井地方面)。
- [43] 渋谷五郎、1975、「玖珂鉄いん石」、山口県の自然、No.32、1-10、山口県立山口博物館。
- [44] 渋谷五郎、1976、「玖珂鉄いん石の鉱物組成」、鉱物学雑誌、Vol.12、特別号、214-221、日本鉱物学会。